

轟実践【3年 学級創造活動】

～ みんなが楽しめる・喜ぶ活動をしよう ～



本実践の主張点

自分にとって価値を生み出す見方・考え方を創造するために、

- 方策Ⅰ 支援の在り方を検証する。
 - ・個人追究を持続させる方策を探る。
- 方策Ⅱ 見取り方・評価の在り方を検証する。
 - ・価値を生み出す方策を探る。

轟提案では、学級経営と学級創造活動の理念を関連付け、年間を通じて様々な角度から支援を行うことが提案された。その中で、理念や想定レベルにとどまるのではなく、教師と子どもの間で、または子ども同士で行われた具体的方策に関わるものについて述べていく。

個人追究の意欲を持続させるための支援の在り方について

【年間を6期に分け、短いスパンの中で体験と思考を繰り返す】

子どもが自分にとって意味のある価値を実感していくためには、自分事として捉えられる豊かな体験をもとに、自己と向き合い、他者と関わりながら問題を解決していくことが大切である。轟提案では年間の活動を「6月中まで」「夏休みまで」「1学期末まで」「11月まで」「冬休みまで」「年度末まで」という6期に細分化し、短期的なスパンを繰り返しながら個人追究を行うよう支援してきた。その上で、1つ1つの時期ごとに、「設定」→「実践」→「評価・修正」→「振り返り」という学び方のサイクルを繰り返していくことが大切であると述べている。具体的なゴールを描くことを求めつつ、短いごとの見通しをもたせていくことによって、子どもは確かに飽きることなく目の前の問題解決に集中していくのだと考える。ここで、大切にしたいのは、体験と集団での思考を繰り返していくことのよさを子どもたち自身が感じていくということである。子どもにとって、大好きな活動に没頭できる時間は何よりも楽しく、活動が軌道に乗ってくれば、いつまでも活動を続けていたいという意識が高まってくる。しかしながら、価値の実感を置き去りにし、体験ばかりに目が向けられたのでは創造活動の理念を達成するには至らない。かといって、せっかく集団で見出した価値について吟味する機会があったとしても、活動への没頭がなければその価値は自分にとって深く意味付けられたものにはならない。教師は常に見通しと敏感なバランス感覚をもち、その場面において子どもがどのような価値を見出せるかということについて考えておく必要がある。今回の提案では、発問からも板書からも、教師の意図性が見えにくかった。子ども一人一人のこれまでの学びをノートや発言、行動などから丁寧に見て取り、子どもの背景を知った上で、全体交流につなげていくようにしたい。

価値を生み出す状況をつくるための評価の在り方について

【全体交流の場面を日常的に取り入れることによって多様な価値の表出をねらう】

轟提案では、子どもが互いに声を交わしながら考えを深め合うことによって、新しい価値が見出されると考え、定期的に価値について語り合う時間を積極的に取り入れている。しかしながら、活動のほとんどが一部の子ども同士の語りで終始していくという展開には危うさも感じる。それぞれ表現力の違いはあっても、それぞれの子どものストーリーがあり、ドラマがある。語りを中心に展開するのであれば、友達の見方・考え方に感受できるようにするための何らかの間接的支援が必要であると考ええる。普段の活動の中で子どもの具体的な姿を評価し、資料や材料について相談したりアドバイスをしたりするなど、直接的な個別支援をすることも必要ではあるが、時には「想定し、しかけ、そして待つ」という間接的な支援を行うこともまた、ありのままの子どもの姿を捉え、自ら学ぶきっかけとなるために大切なことではないだろうか。

学級経営と関連付けた長期スパンでの場づくりやエピソードの積み上げなど、子どもの姿に寄り添いたいという教師の思いが詰まった提案であった。これから年間のゴールに向け、一人一人が夢のあるストーリーを描けていけるよう、子どものためのしかけや環境づくりが継続的に行われていくことが大切であると感じた。

成果と課題

- 子どもたちの温かい関わりから、どのような場面であっても自分にとって意味のある価値が見出されていく可能性があることが明らかになった。
- △ 学びの瞬間を捉えた直接的な支援と、状況や場づくり、環境整備といった間接的な支援とのバランスを図りつつ、子どもが自ら行動し、相互交流によって価値を生み出していけるようになるための支援の在り方について考えていく必要がある。

The Futaka Spirit

(現教だより第18号)

5年 学級創造活動

活動名「みんなが楽しめる・喜ぶ活動しよう」

支援者 轟 秀明 先生

子どもの思いを受け止めながら、笑顔で活動を支援する先生の姿が印象的でした。本時、教師がどのような想定をしておくか、育まれた価値をどう受け止め、学級全体でどう共有していくかなど、学級創造活動の在り方を改めて考える機会となりました。

【子どもの活動】

- 1 友達の活動に対して質問やアドバイスを送る。



友達の頑張りを受け止める



友達に質問やアドバイスを送る。



他者の悩みに真摯に向き合う。



抽出児を軸に話し合いが続いていく。

- 2 個人追究活動を行う。



それまでの学びとつないで活動する。



学びの足跡

(文責 橘 慎二郎)

【轟先生コメント】

学級創造活動では、個々が活動をしている場面、課題や問題を解決しながら、価値を生み出す場面などいくつか切り取るべき場面が想定される。25分の中で何を、どんな方法で、どのように、支援していくかが求められる。本時で狙うべき価値を想定しつつ、子ども達の反応に対して、瞬時の判断が必要であると強く実感しました。2学期に入り、子ども達の個人追究も深まってきています。日々の創造活動の中で、何を想定し、どう支援していくか。私自身も追究していきたいと思います。